琉球大学学術リポジトリ

渡嘉敷村の子育ての現状と渡嘉敷幼稚園における子育て支援「ゆんたく」について

メタデータ	
	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
	公開日: 2008-04-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉葉, 研司, 小林, 稔, Yoshiba, Kenji, Kobayashi, Minoru
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5635

渡嘉敷村の子育ての現状と渡嘉敷幼稚園における子育て支援「ゆんたく」について

A Report on the Present Condition of Child Raising in Tokashiki Village and the Child Care Support YUNTAKU managed by Tokashiki Kindergarten

吉葉研司*・小林　稔*

Kenji YOSHIBA* and Minoru KOBAYASHI**

要　約

渡嘉敷村の人口推移や子育ての現状から人口が子育て世帯で上昇していること、人口上昇が村外出身者によっておきているため子育て世帯の９割が核家族化していること、したがって孤立化をさけるための子育てネットワークが必要になってきていることを明らかにした。このような現状に対する取り組みとして渡嘉敷村立渡嘉敷幼稚園では「ゆんたく」が行われており、これは、教諭が親に教えるスタイルをとらず、親が主体の「はなしやすさ」「とりくみやすさ」「つながりやすさ」をめざしている。

はじめに

我が国は2005年の人口特殊出生率[1]が1.25と未曾有の少子化社会を迎えている。沖縄県は、1.71と全国１、これだけをみると沖縄は子育てをしやすい県だと思われがちだが、人口特殊出生率は年々前年度を下回っている。都市部では保育所に入所できない待機児童数の急増、島嶼・へき地などでは産科医の廃業・撤退が相次ぎ、子育てしやすい社会環境の整備が急務である。政府は、地方自治体に、エンゼルプランや次世代育成推進対策など、地域の実態に基づいた具体的な支援策を策定するようにもとめており、これに応じて地方自治体は、財政が厳しい中、様々な方策を講じようとしている。しかし、国のフォーマットに基づくこれらの支援対策とそれを紹介する多くの事例は都市部での子育て支援対策が中心であり、へき地・島嶼地域の子育ての実態やそれにもとづいた子育て支援策についてはあまり紹介されることがない。

本論では沖縄の島嶼地域の一つである渡嘉敷村立渡嘉敷幼稚園で2006年９月より行われている「ゆんたく」という取り組みを紹介し、渡嘉敷村の子育ての現状について触れていく。なお、この「ゆんたく」と幼稚園における子育て支援事業については渡嘉敷村立渡嘉敷幼稚園教頭新垣光枝教諭との聞き取り（2007年１月５日実施）をもとに本論執筆者の責任でまとめたものである。

１．渡嘉敷村の人口推移

まず、渡嘉敷村の概況[2]をみてみよう。渡嘉敷村は、那覇市の西方32km、北緯26度、東経127度に位置する、南北９km、東西２km、面積15.8k㎡の細長い形状の渡嘉敷島、前島、拝島、

* 琉球大学教育学部　Faculty of Education, University of the Ryukyus

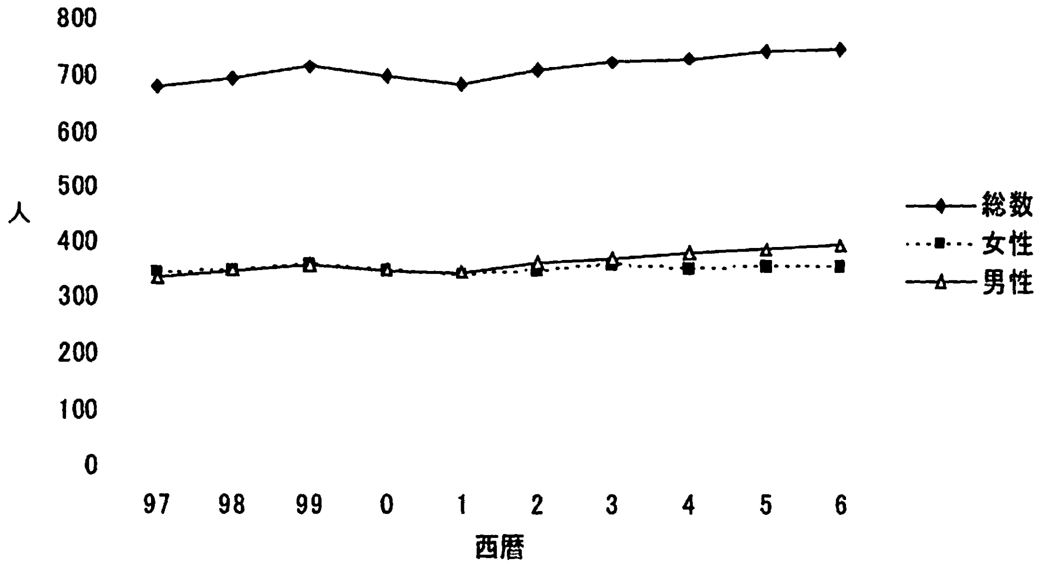


図1．最近10年の渡嘉敷村の人口推移

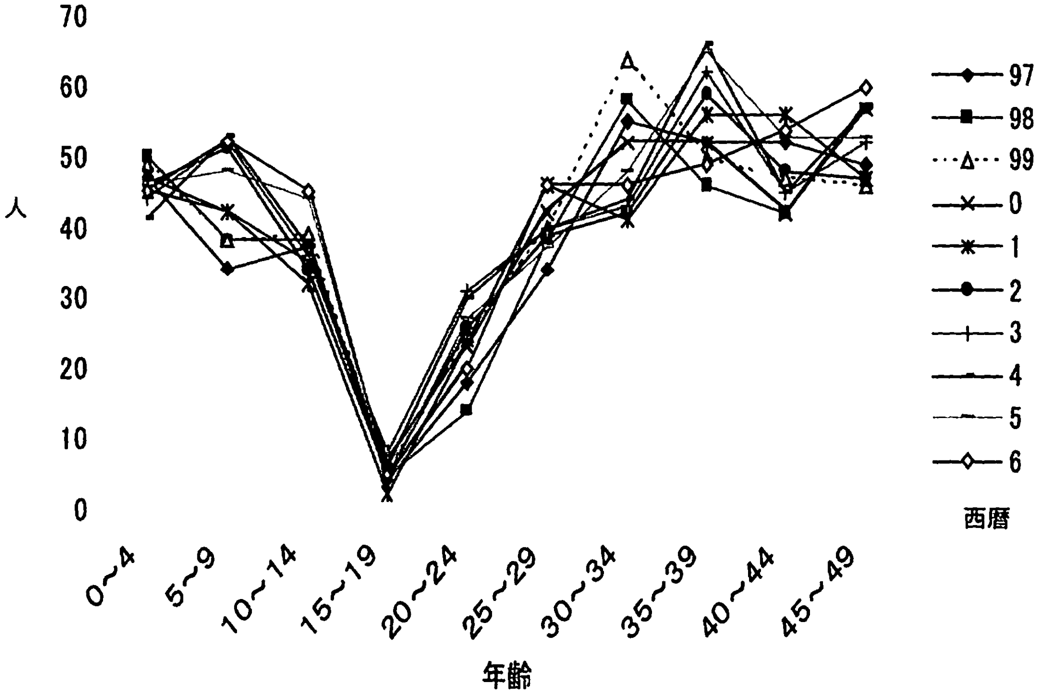


図2．渡嘉敷村の最近10年間の年齢別人口推移

中島、端島、儀志布島、慶伊瀬島（３島:神山島、ナガンヌ島、クエフ島）など大小10余の島から構成されており、現在、渡嘉敷島にのみ住民は生活している。集落形成は、近世からの集落が渡嘉敷、阿波連の２つである。一方、渡嘉志久集落は、1981年に村営住宅への初入居に始まり、リゾート施設の建設等により形成された地域である。以上の３つが現在の渡嘉敷村の集落となる。

では、最近10年の渡嘉敷村の人口推移を、渡嘉敷村住民基本台帳をグラフ化したものをもとにみてみよう。図１は1997年より2006年まで（共に３月31日現在）の総数と男女比をグラフ化したものである。

これを見てもわかるように、ここ10年間の人口は700名前後でほぼ横ばいであり、2001年以降は若干増加傾向にあることがわかる。2001年総人口は681名であったが2006年は742名と51名の増加がみられ、これを2001年の人口からみれば7.4%近く増加していることになる。

図２は、子育て期の人口推移をわかりやすく見るため、出生から子育て期を終える49歳までの年齢別の推移を５年間おきに抽出したものである。この、子どもと子育て世代の人口推移をみると、２つの特徴を持つことがわかる[3]。

その第一は15歳から19歳の時期に人口が一桁台に急減している、ということである。これは島内に高等学校を持たない島嶼部が持つ共通した課題だといえるが、渡嘉敷村の子ども達は、高校進学をする場合、島をいったん離れて生活をすることを余儀なくされる。このことが15～19歳の人口急減の理由である。そしてこの減少傾向は、高校進学だけではなく、小学校を卒業し中学へ進学する年代（10～14歳）から始まっていることがグラフからわかる。これは受験の準備を少しでも早く受験する土地で行えるようにという親の意図がこの時期の人口減少に影響していることが予想される。

第二に30～49歳までに、若干の揺れはあるものの、人口の減少傾向がみられる。詳しい調査が必要であるが、一つの要因として、子どもが進学で島を離れる際、両親や母親も一緒に島を離れるケースがある、ということである。これはこの島の子育て世代が、島の人達の言葉で「旅人（タビンチュウ）」と呼ばれる人達が圧倒的に多いことに現れている。

“タビンチュウ”とは文字通り旅人を表す言葉である。村外出身者を意味するもので、島で暮らしていてもそのうち島を離れてしまう人であり、島で生まれ、島で生涯を終える島人（シマンチュウ）と対称化させて用いられる言葉といえる。沖縄県立看護大学の川崎道子らがおこなった調査[4]によれば、渡嘉敷村内で乳幼児の子育てを営む母親は村外出身者が８割を占める。近年では村外者同士が渡嘉敷に移り住むケースも増えている。人口推移を見ても、15歳～19歳で落ち込むものの、20～24歳で再び上昇がみられ、30から39歳までに人口のピークを迎えている[5]が、このピークはいったん島を離れた若者が島に戻るだけでなく、村外出身者が渡嘉敷に移住したことによって生じたと考えられる。これら村外出身者は血縁を持たない核家族であり、土地に縛られない村営住宅で生活する。土地を持たない、血縁をもたない、とすれば、子どもの進学などを期に、島を離れて新たな生活を営む可能性は高いといえる。

以上、述べてきた人口推移の特徴をまとめてみる。

① 渡嘉敷全体の人口推移はなだらかにではあるが増加傾向にある

② 増加の要因として村外出身者が渡嘉敷に住み、さらに子育てを渡嘉敷で行うことがある。

③ 人口の増加は高校進学前後に子ども数が村外に流出するために急減する。

④ ③にみられる傾向に相まって高校進学を期に子どもと一緒に島を出る親がいることが予想される。

上述した人口推移からだけを見れば、乳幼児期の問題ではなく、むしろそれ以降に課題がある。しかしそれは幼児期に問題がないのではなく乳幼児期の子育て問題を支援する努力がされているから、といえる。次項から乳幼児期の子育ての現状をみてみよう。

2．渡嘉敷村における子育ての現状

それでは、渡嘉敷村での子育ての現状・課題を先の川崎らの母親調査を参考にみていくことにする。この調査は、乳幼児の子どもを持つ渡嘉敷村内の母親38人のアンケート調査をもとに育児の実態を分析したものである[6]。

渡嘉敷の子育て世帯は９割が核家族であり、母親の８割が村外出身者である。就労状況は専業主婦・サービス業・観光産業・公務員の順に多く、就労の場合、村外出身者にサービス業や観光産業が多くみられたというが、調査結果を見ても具体的な数値が書かれていない。しかし、渡嘉敷村立へき地保育所（平成２年開所）が１歳半からの入所であることを考えれば、１歳半までに子どもを預ける場がない場合、専業主婦として子どもを育てるほかはない。また、村内の産業が民宿・ペンションなどの観光産業への依存が高いことを考えれば、両親共に観光業を営みながら生計を立てる率が高いことは予想できる。

子育て環境であるが、「母親の病気の時に子どもの世話をする人」が「いる」と答えた母親は、村内出身者は10割であった。一方、村外は７割、３割の村外出身の母親は子育てを頼むことができる他者をもっていない状況におかれている。また、すべての母親が「子育てに困ったことがある」と述べている。

子育てについて相談できる人が「いる」母親は93.8％と多いが、その内訳を見ると、最も多いのが「夫」で67.7％、次に「自分の親」16.1％、「友人」12.7％である。この結果からは、「夫」以外の重層的な相談関係は築きにくいともいえる。したがって、気軽に相談しあえる親同士のコミュニケーションの場が求められていることがわかる。

川崎らもこの調査をもとに参加者同士の話し合いの場を持ち、「昔は普段から隣近所が、お互いに声をかけあい、子育てもユイマールでやっていた」や、「乳幼児をもつ県外出身者の親が多くなってきて同世代との交流はあるが、年配の人との交流はほとんどなく、子どもを預けることができない」、「気軽に子育てについて相談できる人、子どもを預かってくれる人など、困っているときに支援できる体制をつくる」、「乳幼児を持つ親同士が集える場づくりが必要である」などの意見が親たちから出されたことを指摘している[7]。

渡嘉敷村の場合、渡嘉敷・阿波連・渡嘉志久の３集落からなることは前述した。子どもの人数を考えた場合、各集落で子育てをする世帯は限られる。さらに保育所に子どもを預けることができる就労世帯をのぞいた場合、各集落で子育てをする専業主婦層はさらに限られてしまう。保育所は・幼稚園は渡嘉敷集落にしかないので、専業主婦層は渡嘉敷において、孤立する危険性があるのだ。以上のことから、渡嘉敷村における子育ての現状には次の特徴点があると指摘することができる。

① 子育て世帯の母親を見ると８割が村外出身者である。

② 子育て世帯の9割は核家族化し、村外出身者の場合、子どもの世話や子どもの相談など重層的環境の中で保障される子育て環境の枠外になる可能性がある。

③ したがって何かあったとき相談できる環境・協力しあえるネットワーク環境を、世代同士のみならず世代をこえて形成していく必要がある。

県外からの移住者が増加している島嶼部では、相談する機関が近くにないため、都市部と同じように「孤立した子育て」問題を抱える危険性が高い。この点を考慮しながら乳幼児期からの子育てを支援するシステムが必要となるのだ。

3．渡嘉敷村立渡嘉敷幼稚園における「ゆんたく」のとりくみについて

3－1渡嘉敷村立渡嘉敷幼稚園の概況

「ゆんたく」のとりくみを紹介する前に、渡嘉敷村立渡嘉敷幼稚園（以下、渡嘉敷幼稚園）の概況をみていきたい[8]。渡嘉敷村には村立渡嘉敷幼稚園が１園、渡嘉敷港の近くにある渡嘉敷小中学校に併設されている。現渡嘉敷幼稚園は1974（昭和49）年の開園だが、その前史をたどると、米軍統治下の1946年に県内に制定され

た「小学校令・同施行規則」により県内の小学校に幼稚園が付設されることが明記され、渡嘉敷においても渡嘉敷小中学校と阿波連分校とに公立幼稚園が付設されることになった。しかし、1947年１月１日、わずか１年で幼稚園の維持管理に必要な政府補助金が打ち切られ、県内全域で運営を維持できなくなった公立幼稚園が廃園に追い込まれていく。渡嘉敷も例外ではなく開園わずか３年、1949年３月で二つの幼稚園は廃園となった。

この後、沖縄の復帰と前後して公立幼稚園が沖縄県内に政策主導で整備され、復帰１年前の1971年には沖縄県内の70％の５歳児が幼稚園に就園するようになる。このような沖縄県内の状況と、国立青年の家が渡嘉敷村に開設されることによる本土出身の職員の幼児教育への要求を背景にして、1974年に現在の渡嘉敷幼稚園が開園することになる。現在の幼稚園教頭新垣光恵教諭は74年の開園以来渡嘉敷幼稚園の教諭を務めており、渡嘉敷の幼稚園児を30年以上見続けている。

現在の渡嘉敷幼稚園の対象児童年齢は４歳から就学までの２年保育である。これは沖縄県の平均的な幼稚園が５歳児のみの１年保育であるのにくらべて１年早くからであり、開園３年後の1977年という比較的早い時期から実施されている。保育時間を５時まで延長して有償契約で子どもを保育する「預かり保育」も2001年には実施されていて、就労世帯の放課後保障というニーズに応える努力を早くから行っていることが伺える。園児数は2006年12月現在で４歳（年少）児13名、５歳（年長）児９名の22名である。新垣教諭の話によれば、子どもたちのうち両親とも村外出身は９名、残り13名の母親はすべて村外出身者であり、これは川崎らの調査よりもさらに県外出身者が増加し、核家族化傾向が強まっていることがわかる。

３－２「ゆんたく」について

“ゆんたく”は、沖縄の方言で「話す」という意味を持つ言葉である。その意味が転じて、井戸端会議をしたり、お酒を飲みながら話しを楽しむことにも使われ、「人が楽しく話を交わしている」という意味で使われることが多い。未就労の母親を対象とした子育て支援の場「ゆんたく」もこのような意味をもちあわせている。

「ゆんたく」が開始されたのは2006年の９月からである。この実施を母親達に呼びかけた教頭の新垣光枝教諭は呼びかけた背景を以下のように説明する。

> 渡嘉敷幼稚園は平成13年から働く世帯のための預かり保育を行ってきました。制度的には平成13年からですが、試験的に希望者を対象に時間延長して預かり、それと並行しながら「預かり保育」が必要か否か、有償になってもいいかというアンケートを行いました。親たちの求めるニーズは高く、制度化にこぎつけたのですが、預かりを行いたかった最大の理由は放課後、園児達が、村内で放置されてしまうことでした。

沖縄県の場合、幼稚園就園率は他県に比べ非常に高く平成17年度３月卒業の就園率は81.6％、８割が幼稚園に通う県は沖縄県のみである。このことは、多くの場合、就労世帯の子どもも５歳児になると幼稚園に転園することを意味するが、幼稚園がそれに併せて開園時間を一律に延ばしているわけではない。そうなると就労世帯の園児達は放課後放置されてしまう危険がある。就労世帯の子どもたちの放課後保障は沖縄において重要な課題[9]であり、上述した新垣教諭の話は渡嘉敷村も例外ではないことを証明している。特に山を隔てて３つの集落がある渡嘉敷村では、集落間の行き来は幼稚園児では難しい。子ども数はそれほど多くはなく、集落に帰ってしまえば数人しか子どもはいなくなる。放課後、子ども達を集落に返して孤立させてしまうよりも、子ども同士が触れ合い、安心して遊べる場となることが渡嘉敷の公的な幼稚園が果たす役割だと捉えていることがわかる。

> 預かり保育で就労世帯の子どもたちの保障はできました。でも、まだ手がつけられない問題がありました。それが未就労の親の子どもでした。就

労世帯の親は保育園から出合っているので集落を越えてつながりあっています。預かり保育によって子どもたちの放置も避けられます。しかし、残された未就労世帯の子どもと親が完全に孤立してしまうのです。

預かり保育により就労世帯の対策はできた。しかし、預かり保育で子どもが幼稚園にいることになれば、残された未就労の母緒と子どもたちは地域で孤立してしまう。このことへの対策として、数年前から子育て支援教室として“絵本の読み方”等といった幼稚園教諭が主体となった育児支援を立ち上げたという。このねらいは二つある。一つは親同士をつなげること、もう一つは幼稚園に子どもたちを連れてくることにより子どもたちが孤立することを少しでも緩和すること、である。しかし、この取りくみは、参加者である親がただ講座に参加するだけの受け身になってしまい、参加者間の交流もなく、参加者数も減少の一途をたどる。

やはり、親たちが主体的に取り組むようなものでなければ、親たちも集まりたいと思いません。そこで、幼稚園教諭が何かを教えるようなスタイルから、親たちが気軽に集まり、子育ての悩み・楽しみなどを気軽に話せるスタイルへ運営の転換を図りました。

つまり、①親が主体となり、②気軽に親同士が「ゆんたく」できる場であり、③何かを誰かから教わるのではなく、親たちの発想によって何かを「創っていく」場を幼稚園に開設した、この、「はなしやすさ」「とりくみやすさ」「つながりやすさ」が「ゆんたく」設立の背景と目的なのだ。「ゆんたく」は毎月２回木曜日の午後３時半から４時半、幼稚園の３～４人ほどで満室となる事務室を使って行われている。参加者は未就労の母親が対象となり、毎回４名ほどが参加している。わざわざ狭い事務室でなくてもホールを使えばいいのだが、ここにも新垣教諭の意図がある。

狭い事務所だと身体をひっつけあわせてないと話せない。ホールのような広いところだと距離感がつくられてしまう。狭いところで袖触れ合うような関係がつくれればいいと思ったのです。幼稚園のことも間接的に見せられるので、幼稚園にも気軽に来園できるようになるではと思ったのです。

「ゆんたく」する際に距離という視点は重要に思える。お互いが親密になるためには多少窮屈な方が表情などもわかる。距離が短ければ言葉だけでなく身体の表情を確かめ合いながら、ただしゃべるだけでなく、相手の言葉にも耳を傾けなければならないだろう。また、事務室という場が、親同士だけでなく、親と幼稚園との距離を縮めていく可能性もある。「場」という隠れた配慮が「ゆんたく」にはある。

では「ゆんたく」ではどのようなことが行われているのであろうか。手元に『ゆんたく』という「ゆんたく」発行の通信がある。これをみると「ちんすこう作り」「焼き芋パーティ」「貝殻でのストラップ作り」と、何かを作ることを中心に母親達が気軽に「ゆんたく」していることがわかる。しかし、それらの企画・立案は親たちである。幼稚園教諭は何か煮詰まったときにヒントを与えるだけである。

この通信も集まったお母さん方が発行している（資料を参考のこと）。集まったお母さん達で担当を決め、題字、レイアウト、記事の内容などは担当者が考え発行している。そのため、毎号、担当者の個性がにじみ出る通信になっている。

その通信の一つを新垣教諭は手にとって説明してくれた。そこには「父母による親子のための島遊びカレンダー」と書かれている表がある（資料『ゆんたく』第３号を参考のこと）。「島を使った遊び」の年間カレンダーを親自身が調べ作成しようとしているのだ。

彼女たちは、元々、渡嘉敷が好きで渡嘉敷にきたところが共通しています。だから渡嘉敷をもっと知りたいと思っている。これは、ある親が一生懸命作ってもってきたんですが、渡嘉敷が好きな

人たちだから簡単につながることが可能となるのです。

これを通信に掲載したのは別の母親であるが、彼女は記事にこう書いている。「ある程度まとまってきましたが、まだまだ資料（情報）があつまれば充実するなと思います。皆様の島遊びのアイデアお待ちしています」（『ゆんたく』第３号より）。ある母親の渡嘉敷への思いがある母親の渡嘉敷へとつながりあうような暖かみを感じる文章である。

参加した母親の感想を拾ってみよう。

雑談のようで雑談でもなく、“子育て”から逃れられない親の息抜きのような、そんな感じもしました。でも、そういう「ゆんたく」のなかから良いアイデアや意見が生まれることが多いと思います。いろんな意見が聞けて何かできることがあればお手伝いしてきたいと思います。よろしくお願いしまーす。（『ゆんたく』第２号より）

はじめて「ゆんたく」に参加させて頂きました。その名の通りコーヒーを飲みながら「ゆんたく」し、以前からやってみたかった、ひも編み（？）を光枝先生に教えて頂きました。家に帰ってからも作ってみました。３本作ってしまいましたー！短い時間でしたが楽しかったです。（「ゆんたく」第８号より、ストラップ作りの感想から）

上記の感想には、島嶼部でも子育てが「逃れない」ものであると感じてしまう、親の子育てに対する緊迫感を読み取ることができる。未就労で、一人で子育てをしなければならない、そういう「逃れられない」現実があるからこそ、気軽に「息抜き」し、気軽に子育ての話しをする場が必要なのだ。また下の感想では何かを教わる受け身的な講座のようなものではなく、親が主体となり、コーヒーを飲み「ゆんたく」をしながらのうちとけたムードでストラップを作ったことの楽しさが読み取れる。ただ作るのではなく、同じ立場の親たちと「ゆんたく」をしながら何かを作ったからこそ、初めての人でもうちとけ楽しいという実感を持ったに違いない。啓蒙的に子育てを教え込むのではなく、親たちが集まり子育ての思いを共有するところから始める子育て支援が重要であることを親の声からくみ取ることができるだろう。

離島やへき地、という一言でその土地を知ることはできない。沖縄の島というイメージは自然豊かでのんびりとした「癒し」のイメージを私たちに抱かせるかもしれない。しかし、そこで生活をする生活者の視点に立てば、村の人口や産業構造とその変化によって生活のありかたが実に多様で複雑であることを実感する。渡嘉敷村は近年、村外出身者の増加による核家族化の進行によって、「子育てを知らない世代の孤立した子育て」という都市部と共通の社会現象が生じている。この「孤立化」に歯止めをかけ親同士の結びつきをつくる核となっているのが公立幼稚園と公立保育所だといっても過言ではない。今回保育所は取り上げることができなかったが、保育所に訪問した際の保育所の主任保育士の次の言葉は印象的である。

私も村外出身者ですが、若い人達（村外出身者）は渡嘉敷が好きでここに来た人達です。だから集まることができる場さえあれば、“渡嘉敷が好き”、でつながって、いろんなことを話し合える仲間になりやすいのです。

この、保育者の声は「ゆんたく」の親の声と接続している。まずは気軽に「渡嘉敷が好き」でつながり、「好きな渡嘉敷で逃れられない子育て」をしているという生活の現実から生じた喜怒哀楽でつながる。このつながりが深まる中で一緒に何かをやっていく喜びを母親たちは実感しているように思える。重要なのはそこで悩んだときにちょっとしたアドバイスを提供できるスーパーバイザーが必要だ、ということだろう。これが幼稚園教諭であり保育士の重要な役割となっていることは強調しておきたい。渡嘉敷幼稚園の新垣教諭は次のように指摘する。

今回の「ゆんたく」のような場は、私的なおしゃべりの場のようにみえますが、私はそういう場を私的な場でなく、幼稚園で、公的な場を開放することによって、私的な場にはない"つながり"や可能性が創られていくと思っています。

親たちだけでただ話をしているだけでは新しい取り組みの可能性をみつけることは難しい。そばで耳を傾け、時に「子育ての先輩」として様々な示唆を与えるスーパーバイザーがいるからこそ、母親達の話の質を高め、取り組みの可能性が見えてくるのだ。そこに、幼稚園や保育所といった公的な場が「ゆんたく」の場として開放される大きな理由がある。「ゆんたく」の場で幼稚園教諭がどのような役割を果たすのか、その質的研究は今後の課題としたい。

おわりに

最後に、簡単ではあるが渡嘉敷幼稚園「ゆんたく」の取り組みの今後の課題について筆者の考えを記しておきたい。

第1に、この未就労世帯への取り組みを幼稚園全体の母親の取り組みにしていくことは重要な課題であろう。「ゆんたく」は未就労という同じ立場で、少人数で集まっているという点が「ゆんたく」の話しやすさ、つながりやすさ、取り組みやすさをつくりだしている。このような取り組みは、就労世帯もふくめた園全体の取り組みにして頂きたいのだが、その場合、規模が非常に大きくなる。「はなしやすさ」「とりくみやすさ」「つながりやすさ」を残しながら、幼稚園の母親全体の取り組みとすることが可能か、という課題が残る。「ゆんたく」では、「焼きいもパーティ」を、幼稚園の保護者すべてに拡大した経験がある。このような取り組みを「気軽に話す」ことから、取り組みの「企画」「実施」まで、すべての親を巻き込むものに広げていけるか否かは大きな課題といえよう。

第2に、子育て世帯だけでなく、子育て世帯を超えた世代間の交流、タビンチュー（旅人）とシマンチュー（島人）がまじわり「ゆんたく」する場ができるかどうかも大きな課題である。ただしこの点は幼稚園だけで手に負えるものではない。子どもと幼稚園を核にしながら、様々な世代が「ゆんたく」できる場を渡嘉敷村あげてつくることが、子育て支援だけでなく豊かな地域、渡嘉敷村を創り上げる鍵となるだろう。

以上２つの課題を述べたが、この２点は、「ゆんたく」を積み重ねながら長いスパンの中で形成されるものだと考えている。今回は筆者の都合により、直に行われているものを観察し、参加している母親達の声を聞き、文章化することができなかった。このことは今後の課題とし、今後とも渡嘉敷幼稚園での「ゆんたく」を見続けていきたい。

最後に、この小論をまとめるにあたって渡嘉敷村立渡嘉敷幼稚園永山清勝園長と新垣光枝教頭には多大なるご協力をいただいた。改めてここに感謝の意を記したい。

なお、本研究は、2005～06年度文部科学省特別教育研究経費措置事業「新しい時代の要請に応える離島教育の革新（長崎－鹿児島－琉球、三大学連携事業）」により行なわれたものである。

---

[1] 全国・沖縄県の合計特殊出生率は以下の厚生労働省ホームページの数値を参考にした。http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai05/kekka2.html

[2] 渡嘉敷村の概況については、吉田安規良他（2007）「離島における教育現場の現状報告－離島・へき地教育に関する長崎－鹿児島－琉球，三大学連携事業による渡嘉敷村での教育事情視察－」『琉球大学教育学部紀要』70号 p. 237－261によった。

[3] 人口推移を80歳までひろげてみると55歳から65歳までの間にもう一つに減少期があることがわかる。いわゆる実働世代から老後を迎える時期に人口の流動があり、このことは高齢者福祉を考える上で重要な課題であるが、本論の課題とは言えないので分析は省かせていただく。

[4] 川崎道子・仲里幸子他（2004）：「渡嘉敷村における乳幼児を持つ親の子育ての現状と子

育て支援ネットワークづくり」『沖縄の小児保健』第31号

5 単純にグラフだけを見るとピークは80歳以上となるが、80歳以上はすべてをまとめてしまっているので正確な人口ピークを表しているとはいえない。この点で人口ピークは30から39にある、といえるだろう。

6 川崎道子・仲里幸子他（2004）：前掲書 p.23－25

7 川崎道子・仲里幸子他（2004）：前掲書 p.27

8 渡嘉敷村立渡嘉敷幼稚園の歴史については以下の資料を参考にした。

渡嘉敷村立渡嘉敷小中学校（1988）：「第８章 幼稚園の現況」『創立百周年記念誌』

渡嘉敷村立渡嘉敷幼稚園（1995）：『創立20周年記念誌』

9 沖縄におけるいわゆる「５歳児保育問題」については以下のものを参考にしてほしい。

神里博武・山城真紀子（1999）：「資料 幼稚園における５歳児保育問題」沖縄キリスト教短期大学紀要 28号

神里博武（2000）：「沖縄における５才児保育問題の形成過程」沖縄キリスト教短期大学紀要 29号

YUNTAKU

第　3　号
平成18年度
10月27日発行
渡嘉敷幼稚園

「ゆんたく」ですすめている「父母による親子のためのトカシク島遊びカレンダー案」が、ある程度まとまってきましたが、まだまだ資料（情報）が集まれば、充実するなと思います。皆様の島あそびアイディアをお待ちしています。
下表は　　　　さんが作表してくれました。

トカシキをもっと楽しもう！
父母による親子のための卜カシキ島遊びカレンダー案

	場所		用意するもの
春（3・4・5月）	ひなくし（タイガービーチ）	アーサー狩り	＊滑りにくい靴
	雨上がり、ぬかるんだ駐車場等	藻アーサ（畑アーサ）拾い	
		山イチゴ	
	とかしくビーチ	干潮時、アサリ拾い、	＊スコップ、くまで
夏（6・7・8月）	ビーチ	ところどころにある穴、ほっていくとスナガニが飛び出してくる。 大きな穴にはそれなりに大きなカニがいます。	
	ビーチ	くわがた（詳しい方、情報ください） ＊ここは夏も涼しい！スポットの紹介などもいいかも。	
秋（9・10・11月）		＊秋の遊び方、秋のおいしいもの、知っている方情報ください！	
冬（12・1・2月）	大谷林道	桜見、道の両側に結構桜の木が続きます。 （たまには村内で違う道をドライブしてみるのも。）	
	森林公園	ヤマモモ狩り 滑り台途中から山に入る道あり、迷子にならないよう注意	＊案外山は深いので長ズボンがお勧め
通年または不明	田んぼ用水路	グッピー採り、特に多い時期など分かる方、おしえてくださいね。	＊網
	とかしく海岸公園	奥の川（沼地）で、コケをつつくと透明のエビがいるよ	＊網

・食べるものに関してはどうやって処理、保存、調理するのかなども。
・特に男の子のお父さん、お母さんには昆虫や生き物がいるところなど、教えて欲しい。
（何時ごろ、どんな道具で、など。）
・詳しくかける人はもちろん詳しく、なんとなくの記憶などでも、なるべくたくさんの情報を集め、ゆんたくしながらゆっくりまとめていきたい。
・みんなが知っているトカシキ島のとっておきをいっぱい集めて子供達の目が輝くような休日の遊びの一助になれば。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

10月26日の「ゆんたく」は　　さんと　　さんが出席して、来月から取り組む「読書強化月間」のための「えほんのきのみ」のカードを作っていただきました。全員分のすてきなカードができ喜こんでいます。ありがとうございました。

資料1　「ゆんたく」第3号
発行：渡嘉敷幼稚園「ゆんたく」に集うお母さん達

ゆんたく

第 7 号
平成 18 年度
12月 5日 発行
渡嘉敷幼稚園

※八日の保育参観日は九時三十分から十一時の間、外あそびを主とした子供の遊びを参観下さい。

やきいもパーティーのかんそう!! NO.2

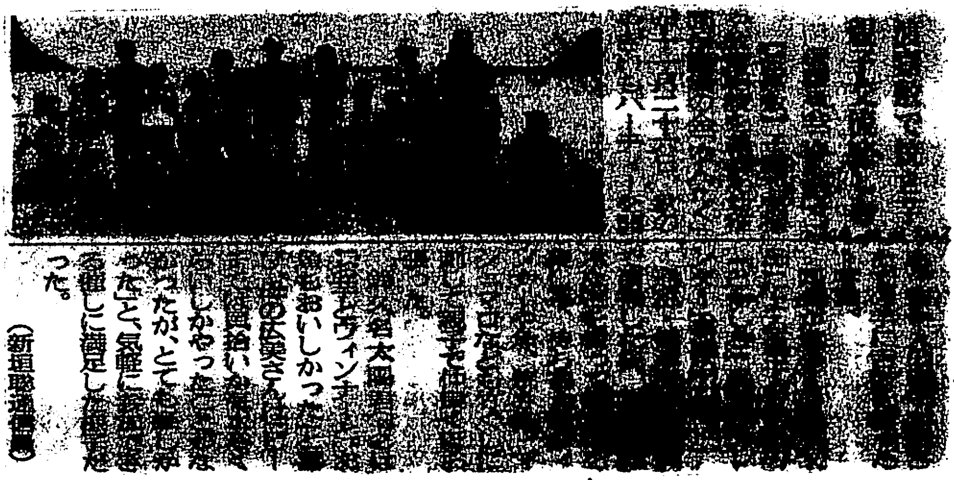
ビーチで焼きいもパーティをしてながらガラスを拾ったり、マキを集めたり、焼いたいもをたべておいしかったです。
また、魚やウィンナーも焼いたりマシュマロも焼いて食べることができ楽しいパーティーでした。
また色々な食物を焼いてパーティーしたいですね。　・・・おとうさん

おいもパーティ

笙　おいもパーティたのしかった。
おかあさんにおみやげももってかえったよ！

焼き芋するには暑すぎる天気でしたが、"ホクホク"の焼き芋に、つなみさんのお父さんの差し入れの魚がおいしくいただきました。子供達は前に幼稚園で焼芋パーティーしているので遊びに夢中、私たち大人の方が楽しんでいたのでは……。光枝先生、ご指導ありがとうございました。・・・さん、見事に焼き芋パーティーを終える事ができてよかったね。お疲れ様でした。

やきいもパーティーがタイムスの「しましまネット」にのりました!!



資料2　「ゆんたく」第7号
発行：渡嘉敷幼稚園「ゆんたく」に集うお母さん達